

B-5-69

多値QAMにおけるパイロットシンボルの検討

A study of inserting QPSK symbols into 16QAM streams

村上 豊 折橋 雅之 松岡 剛史 佐川 守一
 Yutaka MURAKAMI Masayuki ORIHASHI Takashi MATSUOKA Morikazu SAGAWA
 松下技研株式会社
 Matsushita Research Institute Tokyo, Inc.

1.はじめに

近年の移動体通信において、周波数利用効率を重視した狭帯域伝送が要望されている一方、画像等に代表される高速デジタルデータ通信への要求^{[1][2]}も強く、この両者を満足する多値QAMを移動体通信へ適用することが望まれている。

多値QAMにおいては、準同期検波を行う際、位相および振幅を推定するために、既知シンボルを挿入するのが一般的であるが、データ伝送効率の低下を招く。そこで、データ伝送効率の向上を図ることを目的とし、既知シンボルに替えてPSKシンボルを挿入し、このPSKシンボルを用いて位相および振幅の推定を行うと同時にデータ伝送を行う方式の検討を行ったので、その結果を報告する。

2.モデル

多値QAMの一例として16QAMとしたとき、パイロットシンボル挿入方法について、次の2つの方法を比較し、検討を行った。その際のフレーム構成は図1のとおりで、既知またはQPSKシンボル長を1とし、データシンボル長をnとする。

方法1: 16QAMの最大信号点振幅の一信号点をパイロットシンボルとした方式で、受信側では、16QAMを準同期検波する。^[3]（既知シンボル挿入方式）

方法2: QPSKシンボルを、パイロットシンボルとすると同時にデータ伝送を行う方式で、図1における②の16QAMの信号点のマッピングは①のQPSKシンボルの信号点によって、図2(a)～(d)のように行われる。このように、16QAMのマッピングは直前のQPSKシンボルに依存する。また、QPSKシンボル同士は差動符号化する。そして、受信側では、16QAMを準同期検波し、QPSKを遅延検波する。
 (提案するQPSKシンボル挿入方式)

3.シミュレーション結果

上述の方法において、n=7,15としたときのBER特性を図3に示す。その結果、QPSKシンボル挿入方式と既知シンボル挿入方式のデータシンボル長が等しい場合を比較すると、QPSKシンボル挿入方式は、QPSKシンボルでデータ伝送を行う分データ伝送効率が優れており、また、図3からBER特性も優れている。

4.まとめ

16QAMにおいて既知シンボルの替わりにQPSKシンボルを挿入する方法について検討した。その結果、既知シンボル挿入方式とデータシンボル長を等しくした場合、QPSKシンボル挿入方式は、既知シンボル挿入方式に比べデータ伝送効率が優れており、また、受信感度特性も優れていることを確認した。

参考文献

- [1]山田寧，“ISDB統合ディジタル放送”，信学誌,vol.79,no5,pp.521-523,May 1996.
- [2]齊藤洋一，“移動体データ伝送”，信学会1996年ソサイエティ大会TB-1-1.
- [3]三瓶政一，“陸上移動通信用16QAMのフェージングひずみ補償方式”，信学誌(B-II),J72-B-II,No.1,pp.7-15(1989-01)

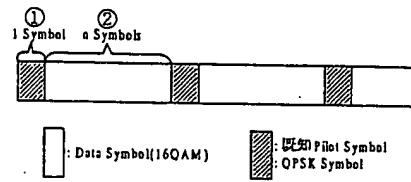


図1 フレーム構成

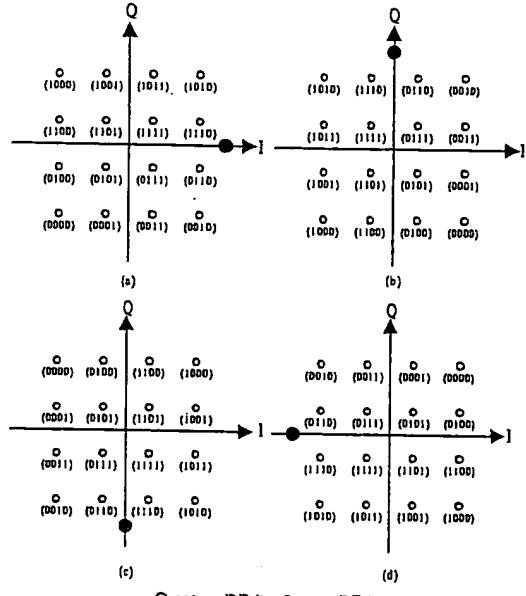
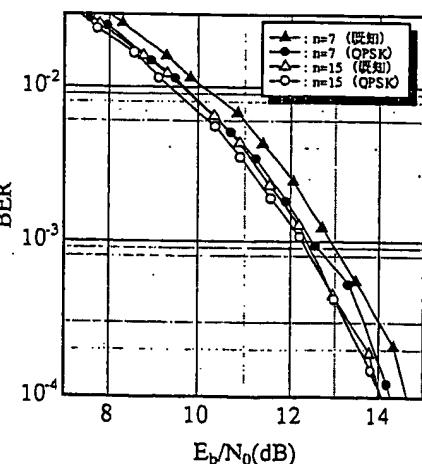


図2 QPSK信号点に対する16QAM信号点マッピング

図3 E_b/N_0 対ビット誤り率の関係